

「私と明治」

私が明治大学を最初に意識し出したのが、高校2年（1990年）である。伝統の明早戦をテレビ観戦したのが最初である。

当時は明治が吉田義人（現監督）、早稲田が堀越、今泉らが中心選手として活躍していた時代だった。

それまでは「地元の大学で良いや」と指定校推薦も考えていたが、それを機に、「早稲田・明治に行きたい」と思うようになった。ただ当時は「早稲田が第一志望」であった。一浪後、早稲田に落ち、晴れて明治に入学することとなる。入学した1992年当時は、バブル景気は崩壊の過程にあったが、まだその余韻が残っていた時代でもあった。

ただ入学早々先輩から「1つ上の先輩に聞いた話よりも就職が厳しいな。お前らのころはもっと難しくなるんじゃないかな」と言われたことを鮮明に覚えている。それが3年後に現実となつた。

大学2年末には、証券市場論の北島忠男ゼミに入室することになった。入室早々、6日間の勉強会があった。朝9時から夕6時まで、先生の本や経済・金融の専門書の講義を受ける。ただそれだけでは終わらない。講義のレポートを書かなければならぬのだ。レポートとは言うものの、実際は、その章を全部、誤字脱字なく書き写すことであった。しかも手書きで。

その作業は要領が良ければ、2、3時間の睡眠時間が生まれるが、ほとんどのゼミ員は、徹夜をしてようやく仕上げることが出来る分量だった。

それが6日間続く。私もこの間ほとんど寝ていなかつた。もちろん離脱する者も出てくる。1人、2人と辞めていく…。

しかしそれが終わると妙な達成感と連帯感が生まれていた。

明治らしい「軍隊スタイル、体育会のノリ」のゼミも当時はまだ他にもあった時代だった。

4回生になると予想どおり不況の真っただ中にいた。「超氷河期」と言われ、統計上は1社でも内定が得られれば「御の字」という時代だった。そういう中、大手IT企業から内定を得たが、都市銀行（現在のいわゆるメガバンク）を目指していたため、内定を辞退しあえて留年を選んだ。

翌年は少し環境が改善されたのか、5社から内定を頂き、その中で猛烈なラブコールを受けた準大手証券へ入社することになった。

その会社も3年で退職し（採用面接での宣言とおり）、政治の世界へと入っていくことになる。

自主留年、脱サラ、政界入りなどある意味で強い精神が必要なことをしてきたが、これも明治大学で培われたものではないかと思う。

最後に明治と言えば「前へ」だろう。大学を離れると少しづつそういう気持ちも薄れていくが、今、同窓会や校友会を通じ改めてその原点を確認している。